

1 日目(12 月 6 日):カオスを道連れにカオスへ

2011 年 3 月 11 日以後、福島からのひどいニュースはますますひどくなったが、同時に一つは(少なくとも政治的に)良い知らせが来たとき、4 回目の日本訪問の機は熟したと思った。

悪いニュースは予想できた。わが国では福島の重大事故の結果がすぐに処理できるとはだれも考えていない。壊れた原子炉を常に冷却すれば、汚染水が大量に出て、その汚染水を何とかして(でもどうやって?)除染しなければならないことは驚きではない。そして、不安定な高所に置かれた 4 号機の燃料プールから 1500 本以上の燃料棒の取り出しが行われなければならないが、これが新たな大きなリスクであることも明らかだ。今回の私の旅行の目的は、作業がどのように進んでいるのか(あるいはいないのか)、複雑な諸問題のための解決がどのように探られているのか(あるいはいないのか)を現地で、自分の目で見ることである。また次から次へと出てくる良くない知らせを考えると、日本の脱原発には本当にチャンスがないのだろうか。日本には自然災害の長い歴史があり、日本人は自然災害に対して私たちとは違った対応をする。つまり、落ち着いて、運命として受け止めている。さらに抗議する、デモする、批判する、反対の声を上げることは日本社会ではいまだにタブーに近い。「そういうことはしないもの!」というわけだ。だからこそ余計に注目に値するのが、よりにもよって保守派で人気のある元首相が、同じ党の仲間であり、政治的には弟子にあたる現安倍首相に反旗を翻したことだ。かつては原子力の推進者が、今や脱原発の擁護者となっている。大使館の誰かが「脱原発を主張した他の政治家は冷たくあしらわれた。小泉の場合はそうはいかない」と言った。安倍政権の誕生とともに脱原発をめぐる論議は消えたように見えたが、今再び浮上している。

これが私の日本訪問を計画した時点での状況である。福島第一原子力発電所をこの目で見るという私の主目的は、なかなか達成できないように見えた。しかし、やっと訪問が許可された。私の事務所と東京のドイツ大使館のお蔭で 10 日間の滞在は完璧に計画された。旅行の出発時点で起きた混乱もこの計画に変更をもたらすことはなかった。エアフランス機の故障のため 1 時間機内で待たされたあと、160 名の乗客は代わりの飛行ルートを選ばされた。私は陽光のパリではなく、嵐のアムステルダムを経由することになったが、東京にはほぼ予定通り到着、そして最初の約束はすでに知っている日本の緑の党の共同代表である漢人明子とすぐる奈緒との話し合いだった。

日本の緑の党にとって状況は容易ではない。すべての力と財源を今年(2013 年)の参議院選挙につぎ込んだ。日本の選挙制度の高いハードルは、高い資金投入を必要とする。我々の友人たちはこの条件のために挫折してしまった。候補者が有名ではない、メディアが報道しない、市民の間では脱原発の数が多いのに、選挙戦で点を稼げるテーマではなかった。しかし彼らは諦めない。目前に控えた地方選挙に向けて態勢を立て直し、地域に根差した土台を広げようと試みている。現在まで、緑の党の黨員数 1000 名、50 の地方自治体に議員を送っているが、主に東京と関西である。

この最初の話し合いを終えて、東京駅に行く。ドイツからの旅行者にとって時刻表通りに走る新幹線は特別な体験である。郡山までの 1 時間半の列車の旅は人口密集地帯を進んで行った。